

小松茂美著

か な

—その成立と変遷—



岩波新書

679



小松茂美著

か な

—その成立と変遷—

岩波新書

679

小松茂美

1925年山口県岩国市に生まれる

1942年山口県立柳井中学校卒業

専攻—古筆学

現在—東京国立博物館美術課長，東京
教育大学講師

著書—「後撰和歌集・校本と研究」「校
本浜松中納言物語」「手紙・人
と書ⅠⅡ」「光悦」(共著)「平安朝
伝来の白氏文集と三跡の研究」
「日本書流全史」「古筆」「日本
書道説林」「平等院鳳凰堂色紙
形の研究」

か な

岩波新書(青版) 679

1968年 5 月 20 日 第 1 刷発行 ©

1974年 4 月 10 日 第 8 刷発行



著 者 小 まつ しげ み
 小 松 茂 美

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 者 岩 波 雄 二 郎

長野市中御所 2-30
印 刷 者 田 中 忠

発 行 所 東京都千代田区 株式 岩 波 書 店
 一ツ橋 2-5-5 会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

大日本法令 印刷・製本

はしがき

現在、われわれが使っているかなは、平がなと片かなの二とおりで、それぞれ四十七字からなる。これらの字体は、明治三十三年（一九〇〇）八月二十一日の「小学校令施行規則」（第十六条）によってきめられた。

すべての物事が、忽然と完璧な形をもって生まれることがないように、かなの場合もまた、その発生から今日のこの形に固定するまでには、長い歴史の中で、数え切れない人々の手を経て、えり分けられつくり出されてきたのである。

この本では、そうしたかなのたどった道すじを、今日に残る資料や遺品に基づいてさぐってみようとするものである。

日本人が、日本列島に居住してから、ほぼ共通の言語で意志を通じあいながら生活するようになったのは、いったい、いつのころであろうか。それは、簡単に解決のできる問題ではあるまいが、ともかくも、数万年前から始まっていたことは確かなようである。文字はもちろんなかった。狭い範囲で、少ない人間同志が生活し合っているときには、文字がなくても言葉さ

えあれば、意志の疎通をはかるのにだいたい支障はおこらない。一万年より以前とされる旧石器時代、あるいはそれ以後、いまから二二〇〇年ぐらい前までの縄文時代の日本人たちは、分断された地域で、狩猟生活をしていた。

それが、つぎの弥生時代になると、稲の栽培がはじまる。縄文時代人も、自然発生的な植物栽培を知ってはいたようであるが、この弥生時代は、いままで自然にまかせていた生活を自主的にするということで、社会の一大変革がもたらされた。

このような変革はおのずから発生したものではなく、おそらくは他からの刺激によるものであろう。西暦前四―五世紀の間に、この水稻栽培が日本に入ってきたという。そのきっかけがどのようなもので、いかような経過をもったかはわからないが、海を渡っての交渉面の拡大があったことは確かであろう。隣に高度な文明国であった中国をもっていた日本に、中国の文字が流入しはじめるのも、この生活革命がもたらしたのではあるまいか。ただし、日本人がすぐ文字を使用できたわけではないが。

中国渡来の文字は画が多く、大体、四角形を基本型として構成されているが、この四角という形を生かして美しく書くということは手練を要し、非常に手間のかかることであった。それを克服するために、画を省略し点や画をつづけた草書体が中国では生まれていた。

日本に文字が入ったころには、中国では、すでに草書体も用いられていたので、篆書・隸書・楷書ともども、この草書も入って来たことであろう。

わが上代人は、漢字の音を借りて日本語の音にあてはめ、文章を書くことを工夫した。万葉がなとよぶのがこれである。日常生活において、速く書くためには、この草書の体が必然的に応用されて、草がなへの道が開けて来た。そして、平安時代に入ると、和歌の復活繁栄と、書道の発展の二面が相補って、より美しく、よりやさしい簡略な形へと進んでいった。今日でいう平がなの体が完成したのである。

同時にまた、上代の万葉がなは、日本語の音一つに対して数種、あるいは十数種の漢字をあてた。じつに九七三にも上る繁雑なものであった。これらおびただしい万葉がなは、簡単でわかりやすく、しかも使いやすいものへと自然に淘汰されていき、次第に使用される文字の種類も狭められていった。とはいっても、これには長い年月の歴史が必要であった。そして、明治の半ば過ぎにはじめて統一をみるまで、今日でいう変体がなといわれるような、一つの音に数種の字体が長い間使われてきたのである。

片かなの起りも、また、平がなと同様に万葉がなである。平がなが漢字の一字全体をやわらかい線にくずしていったのに対し、これは、主として、その一部をとって簡略化したものである。はじめは平がな同様、字体が繁雑に入り乱れて使われていたが、ほぼおなじような経過をたどって今日の形になった。

このように、かなの生い立ちには二筋の道があるが、文字としての平がなは、やがて、書としての平がなによって発展開花し、統一されていったといっても過言ではない。現に残されて

いる資料や遺品も、奈良時代から平安初期までのほとんどは、「文字としてのかな」にかぎられ、それ以後のものは多く「書としてのかな」であることによっても、その位置づけは明らかであると思う。したがって、この本の記述にあたっても、このような方向をとらざるを得なかったことをお断りしておく。

目次

はしがき

I 発 生 一

一 漢字の渡来 二

二 漢字のはたらき 九

三 日本語の表記 一四

四 漢文と和文 二一

五 『古事記』と宣命書き 二七

六 落書きと、文字を理解した人々 三一

七 万葉がな 三五

万葉仮名一覧(三—四)

八 万葉がなの遺品 四六

II 展 開 六三

一 男 手 六九

二 草……………七五

三 女 手……………九一

四 片 かな……………一〇八

五 葦 手……………一二九

Ⅲ 定 着 — 書としてのかな……………一三五

一 平安時代の手習いとその詞……………一三六

二 かなの消息……………一五八

三 調度手本と『古今和歌集』……………一八八

むすび……………二〇七

あとがき……………二二七

片かな字体一覧……………二二九

平かな字体一覧……………二三四

索 引

図版目次

口 絵

- I 伝藤原行成筆 古今集切(不二文庫蔵) 索引 (釈文)
 II 藤原有年申文(讃岐国司解)(巻頭)(東京国立博物館蔵) 三

本文図版

(ページ)

- 千字文(「正倉院文書」のなか) 四
 人物画像鏡(隅田八幡神社蔵・紀伊国名所図会) 一八・一九 一七
 山ノ上碑(群馬県高崎市南八幡町) 二五 二五・二六
 万葉仮名文書(「正倉院文書」のなか) 四六・四七 四六・四七
 正倉院文書紙背落書和歌 五三 五三・五五
 仏足石歌碑(部分)(薬師寺蔵) 五七
 伝宗尊親王筆 催馬楽譜切(鍋島本)(書芸文化院保管) 七三
 伝紀貫之筆 自家集切 八六 索引
 伝小野道風筆 秋萩帖(部分)(東京国立博物館蔵) 八七 索引
 伝藤原佐理筆 綾地歌切(賀歌切)(畠山記念館蔵) 八八 索引
 伝宇多天皇筆 周易抄(部分)(御物) 九五

日本靈異記〔部分〕(興福寺藏)

藤原定家臨書 土左日記(貫之自筆本)(前田育徳会藏)

齋然生誕書付(清涼寺藏)

醍醐寺五重塔初層天井板落書き

伝鴨長明自筆 片仮名本方丈記(大福光寺藏)

伝藤原公任筆 葦手歌切(徳川黎明会藏)

藤原伊行筆 葦手下絵和漢朗詠集(中村延代氏藏)

伝源俊頼筆 古今和歌集序(大倉集古館藏)

金光明最勝王經音義〔卷頭〕(大東急記念文庫藏)

〃 〔卷末〕

因幡国司解案紙背仮名消息〔正倉院文書〕のなか

檜 扇(教王護国寺藏)

虚空蔵菩薩念誦次第紙背仮名消息(石山寺藏)

北山抄紙背仮名消息(京都国立博物館藏)

藤原道長自筆 御堂関白記(陽明文庫藏)

藤原師長筆 消息(不二文庫藏)

伝飛鳥井雅経筆 今城切本古今和歌集(根本謙三氏藏)

藤原俊成筆 昭和切本古今和歌集(不二文庫藏)

高野切本古今和歌集〔部分〕(第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ種比較)

雑

一〇三・一〇三 索引

一〇四 一〇四・一〇五

一〇三 一〇三・一〇三

二七

二六 索引

二五

二四 索引

二五

二五 一五

二五 一五・一六

二六 一五

二五 一五・一六

二五 一五・一七

二六 一八

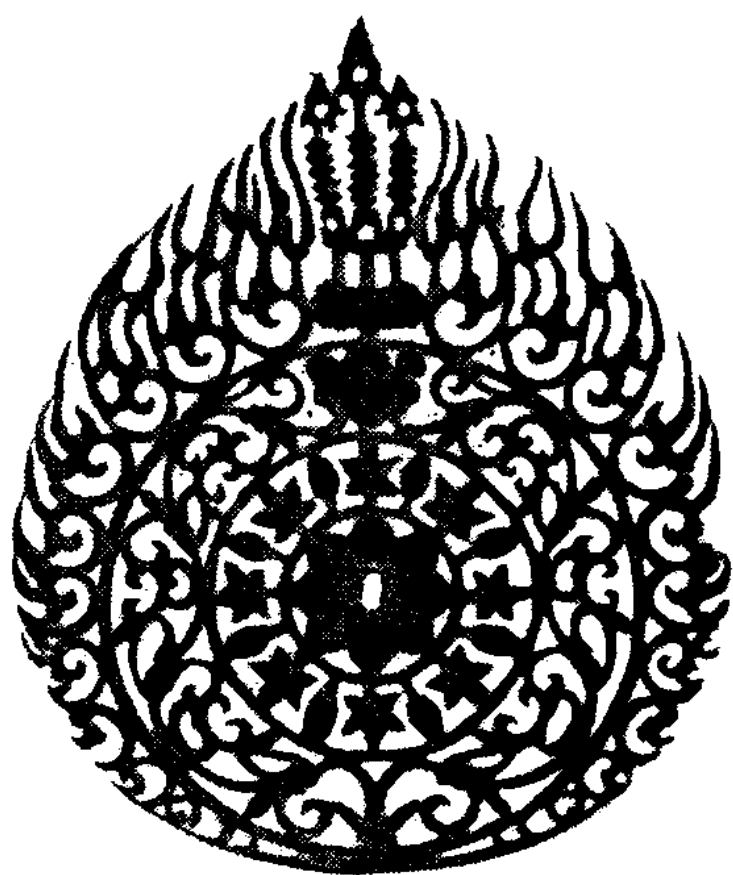
二六

二五 索引

二五 索引

二五 索引

I
発
生



法隆寺献納宝物・四十八躰仏光背

一 漢字の渡来

もつとも著名な記録であるから、はじめに触れておく必要がある。

養老四年（七二〇）につくられた『日本書紀』には、応神天皇の十五年、百済くだらの学者阿直岐あぢきが来朝して、時の太子菟道稚郎子うじのわきいらつこに学問を講じたが、さらに太子の要請により、その翌年の二月、博士王仁わにが招かれて来朝したと記すところがある。この話は『日本書紀』より八年前の和銅五年（七一二）に編まれた『古事記』（中巻）にも記されており、これには、

亦百济国主照古王、以_二牡馬_一禰正、牝馬禰正、付_二阿知吉師_一以貢上。此阿知吉師者、阿直史等之祖。亦貢_二上横刀及大鏡_一。又科_下賜百济国、若有_二賢人_一者貢上_上。故、受_レ命以貢上人、名和邇吉師。即論語十卷、千字文一卷、并十一卷、付_二是人_一即貢進。此和爾吉師者文首等祖。

亦百济こにきしせうこの国主照古王、牡馬禰正、牝馬禰正を阿知吉師あぢきしに付けて貢上たてまつりき。此の阿知吉師は阿直史等の祖。亦横刀たちまた及大鏡を貢上りき。又百济国のに、「若し賢さかしき人有らば貢上れ。」と科おほせ賜ひ

き。故、命みことを受けて貢上れる人、名は和邇吉師わにきし。即ち論語十卷とまき、千字文一卷ひとまき、并せて十一卷とをまりひとまきを是の人たてまつに付けて即ち貢進りき。此この和邇吉師は文首等の祖。は文首等の祖。

(日本古典文学大系本・二四八―二四九ページ)

とある。

ここで、まず問題としなければならないのは、『千字文』せんじもんである。これは中国梁りやうの周興嗣しゅうこうしにより、六世紀のころに編まれたものであるから、三世紀末から四世紀はじめにあたるといわれている応神朝とは、二世紀ほど時代が前後する。が、ともかく、『古事記』の成立した八世紀はじめには、すでにこの『千字文』が相当広く読まれていたことは間違いない。それを裏づける資料が、『正倉院文書』(『大日本古文書』巻第十一所収)の中に発見される。天平勝宝二年(七五〇)三月三日の日付のある「造東大寺司牒案」という文書の紙背しはい(裏面)に、『千字文』の一部分が落書きされているのがそれである。また、天平十五年(七四三)の十月十四日の日付が見える「写疏所充紙張案」の裏にも、『天地玄黄』しやきようせいからはじまる三行の『千字文』冒頭の句が見られる。当時、すでに『千字文』が、官吏や写経生などの文字修得のための、教科書的な役割を果していたものともみられる。とすると、周興嗣の編んだ『千字文』がわが国に移入されたところには、すでに日本においては、これを受け入れるだけの文字文化の素地がかなりつくられていたと考えるのが妥当である。したがって、一般にいわれているように、「論語十卷」と「千字文

千字文
勅貢外散騎侍郎周興嗣次韻
天地玄黃 宇宙洪荒 日月盈昃 辰宿列張
閨三論等必可信

千字文(「正倉院文書」のなか)

一卷」が、正式に漢字の渡来した最初のものであるときめるのは早計であろう。

ともかく、四世紀のはじめごろには、帰化人来朝の最初の波に乗って、漢字と直接つながりのある学者たちが来たことはたしかなようである。というのは、つぎのようないきさつによる。

大和朝廷は百済の要請により、三六七年から数年にかけて弁韓地方(中国漢時代、いまの朝鮮南部)にあった国。慶尚南道の南辺の地と推定される。馬韓・辰韓と合わせて三韓とよんだ)に遠征の軍団を派遣したが、百済はその援助により高句麗の進出をはばむことに成功した。そのため三七三年に、答礼として尚古王から「七枝刀」と「七子鏡」が送られた。この刀と鏡とは、さきに引用した『古事記』記載の、阿直岐が献上したという「横刀」・「大鏡」と同一のものと考え

られる。しかも、武器についての伝承の多い石上神宮(奈良県天理市大字布留)に伝わる「七支刀」が、その銘文から推して、とりもなおさず、この「七枝刀」にあたるといわれる。鉄製の諸刃もろはづくりで、長さ七五センチ。刀身には互い違いに左右三つずつの枝刃が出ている。この劍の表裏には、金象嵌きんぞうがん(鉄身に字形を刻って、金で文字をはめこむ技術)でつぎのような文字が刻まれている。

〔表〕 泰和四年六月十一日丙午正陽□造百練鉄七支刀 以辟百兵 宜供侯王 □□□□作
〔裏〕 先世以来未有此刀 百滄王世子奇生聖音 故為倭王旨造 伝示後世

注 □は判読不明の文字。

これは、表から裏にかけて読むことができる。現代語に直せば、泰和四年の六月十一日、鍛えに鍛えた鉄でこの七支刀をつくった。敵兵をことごとく破ることのできる靈劍である。侯王にさし上げたい。百済王ならびに奇生聖音(貴須王)は、倭王のために、むかしからまだ見たことのないこの刀をつくった。願わくは後世まで伝えてほしい。というようなことになる。「泰和」というのは、中国東晋の年号「太和」と考えられ、その四年(三六九)はさきに述べたように、百済王が日本とともに高句麗に攻撃をかけた年にあたる。したがって、阿直岐・王仁に関する伝説は、多少の粉飾はあっても、日本が朝鮮に進出していったころとだいたいときを同じくする。あたかも、そのころ漢字とそれによる文章の技能がもたらされたと考えるのは、きわめて自然である。同時に、このころを境として、日本人の漢字の習得が急速な進行を見せはじめた

と想像できるであろう。この阿直岐は後世の阿直史の祖先であり、また、王仁は西文首（あぢきのふびと）や蔵史・馬史・栗栖史・高志史などの一族の祖先とされている。史（ふびと）とは、文章にたずさわる役人のこと。

しかし、わが国への漢字の渡来という一点にしばってみれば、かならずしもこのころがその黎明期ではない。それよりも、はるかにさかのぼる時期が考えられそうである。いま、それを裏づける遺品について、時代順にふれてみる。

まず、弥生式（やよいしき）とよばれる中期古墳の中から出土している王莽（おうもう）（漢・東平陵の人。孝元皇后の甥。字は巨君）の「貨泉」。これは、一世紀のごくはじめのわずか十五年間（八一―二三）、新（しん）とよぶ王朝をたてた王莽によって鑄造された貨幣である。その表面に「貨泉」の篆書（てんしよ）（漢字の字体の一。秦以前に通用し、隸書・楷書のもとになった）の二字が鑄込まれている。この貨幣が鑄造後、幾年を経てわが国に渡来したかは不明だが、これこそ、現在までに発見された日本における文字的遺品の最古の実物である。弥生文化のはじまった時代には、すでに、朝鮮楽浪（ちくろう）の文化が強く働きかけており、このような中国の通貨までが持ち込まれていたのであろう。しかし、もちろん当時の日本人が、文字としての認識を全くもっていなかったことは、舶載品を手本につくった鏡の中に、文字が逆になったり、位置をとりちがえたりしていることから知られる。

つぎは、本家の中国側の書物に記された漢字遺品の実物。これは、偶然にもわが国で発見された、例の金印（国宝。黒田長礼氏蔵）である。戦後、この「漢委奴国王」（かんのわのなのおう）の印は、古代史の究明